

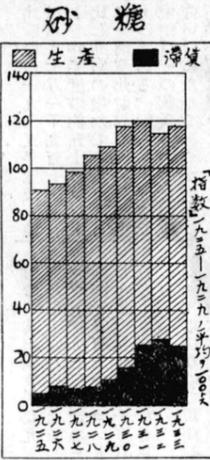
産業欄

世界各地で採用せる 生産制限政策

国際連盟発行「世界の経済状態」(一九三三—三四)に「世界における生産制限政策」なる一報告が載つてゐる、重要部分だけ譯載する……

併しながら一九三三年度中において最も有意義に行はれた生産制限方法は小麦、糖、棉花、生糸、珈琲、茶、砂糖等農産品に對するものであつた、これには右の外に日本における米、中歐に於ける材木、フランスに於ける葡萄酒、澳洲—ニュージーランドに於ける獸肉、トリノ—ドイツに於けるカカオ等が挙げられる

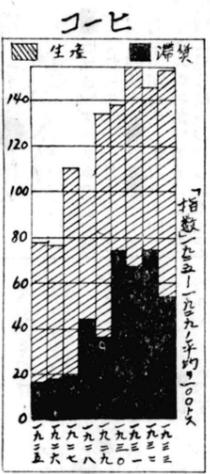
砂糖 生産制限は現在最も盛んであるものうちでは最も古く一九三一年五月白耳義、玫瑰、チエコ、獨逸、ハンガリー、ジャマ、墨西哥、ペルー



ポロランド、ユゴスラヴ等によつて協定されたものであるが、これら協定国における生産高はその後著減を示せるに一方協定外に於ける生産は却

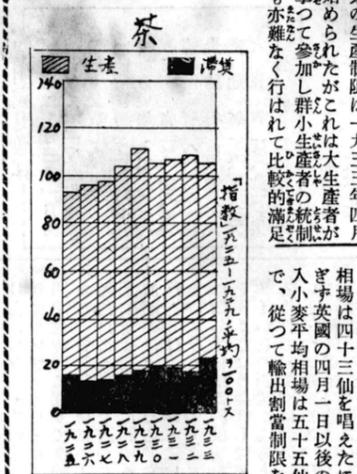
すべき成果を得られた本政策はセイロン、印度、九三三—四年度輸出最高額は九二九乃至九三三の三年間平均輸出高の八割五分まで制限された、その後主要市場における茶の需要幾分反動しストックも減じた結果市場も持直して来た、それにより九三三—四年度輸出高は八割七分五厘に増加されてゐる

通商會議の直後ロンドンにおいて主要輸出國間に成立した小麥に對する協定は先づ輸出を制限する爲め九三三—四年度度三十二萬噸を削減したに拘り、ニュージーランド地方の播種量を一分五厘削減したのであつた

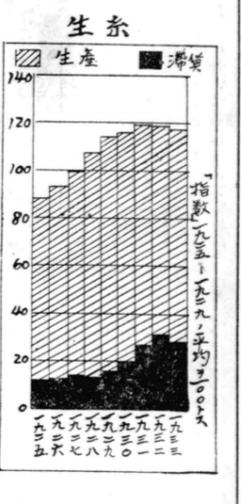


た跡を見ない、消費も市價低落に拘らず増加の傾向なく、九三三—四年度産額はブラジルの増産の結果當該年度世界消費高を超過すること實に一千七百萬噸といはれる

斯くして市價の騰上を期して肝心の輸入國では却つて輸入防壁のため國内において生産奨励を行つたため協定國が所期した丈の相場(米金六十三仙〇二)をいくとも十六週間維持せざるに至らず、九三三—四年度相場は四月一日以後の過半に於いては概して協定國の相場より五仙六六、従つて輸出制限政策の効果を認めざるを得ない

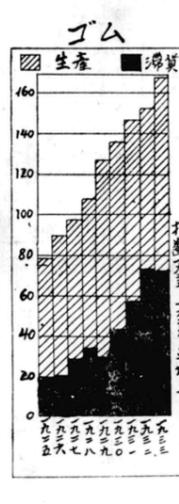


茶の生産制限は一九三三年四月開始されたこれは大生産者が出資して小生産者の統制も亦難く行はれて比較的満足



けた協定國は九三三—四年度の初めから何れも不平を持ち出したのであつた

その他に行はれてゐる重要な生産制限に生糸、棉花、糖、綿花、護謄等がある



ある、生糸は主として日本の係る所だが日本の産額も世界的に驚異的となつてゐる人絹の市價は激落する程の増産振りがはつて増加し生産高も削減の模様がない、政府はこれが對策として購買上を行つてゐるが一九三三—四年度政府は總ての輸出品に對する統制を得た、これは當然生糸にも適用されるべく今後の成行は注目される

棉花の生産制限政策は現在アメリカ合衆國のみに施行されてゐる、護謄の生産調節はすでに従來の方法で大した効果を見なかつたにも拘らず最近また國際的統制をとることとなつた

九二五年來護謄生産高は毎年消費高を凌ぐ形勢に在り九三三年に至りそのストックは遂に一ヶ年間の消費を支ふる量に達したといふ大なる缺點がある、そこででは護謄の使用法並に調製上の注意を述べる事にしよう

食葉害虫駆除には砒酸鉛がよい

近來諸種の食葉害虫の駆除に毒劑の應用が次第に行はれる様になつた、殊に葉を喰する甲虫類の出來ない頑強なものが少なくない、是等頑強な害虫を駆除するには毒劑を使用するのが最も有効な手段である、毒劑として今日使用してゐるものにベルデ、パリ、砒酸鉛、砒酸鉛等があるがこれ等のうち砒酸鉛を除くはそれ以外の諸害虫が極めて有害に安全に使用することが出来ないと云ふ大なる缺點がある、そこででは砒酸鉛の使用法並に調製上の注意を述べる事にしよう

馬と生殖

生物は凡て個體並に種族維持の爲めにそれ／＼本能を有するものである、哺乳動物においても子孫蕃殖の爲めに本能的に種々なる生理的現象が起る、即ち雌は或る成熟期に達すれば一定の時期を限りて發情現象が起り、雄はこれに接し生殖を行ふが、この發情期以外には雄は雌の發情期に對しては通常色慾の發動には時期を限ることなく發

此の發情現象は卵巣の濾胞ホルモンによつて惹起せられるもので雌が發情してゐる時は卵巣にグラフト濾胞が成熟しその成熟中に卵濾胞ホルモンを分泌し、發情の末期においてグラフト濾胞は破裂し排出された卵は輸卵管内に進みここで精虫と結合する、この様にして卵の成熟と發情と交尾と精子の進入と排卵とが發情閉止と一致して行はれ、子孫蕃殖の目的が達せられる、但し例外的には雌は動物には各々種類によつて一

雌動物の生殖成熟とは始めて卵が排出される時期で、人の思春期に相當し、この時期に達する年齢は種類、氣候、風土、飼養管理等によつて早晩は一八ヶ月から、通常一五乃至一八ヶ月である、若しこの時期は未だ身が發育中であるから實際に蕃殖に供用するのには發育の完了した五才に達してからである

成功館

古謝將義 電話 五二五五

サントス市セナドール・フェイジョウ街三三二

朝日旅館

館主 山口 兩 七

(富永パール筋向ビント薬局下隣)

ホテル・アサヒ

ソコ線ランシヤヤ駅 郵箱 五十四番

好機!! 逸する勿れ!!

聖市入口約五城の肥沃地、コチア新街道六キロの地點水流源泉有、價格三十コント、委細は左記御覽照會

Av. Dr. Arnaldo, 14 - Marmoria Maria

Y. KINJO

CIRURGIÃO DENTISTA

R. Christovam Colombo, 3-3 and. s.14

PHONE. 2-8058 - S. PAULO

御葉子店

フロンセリイロ

フルタード街五番

電話 二一八三三

住宅地に果樹園に

北巴拉ナ土地會社指定

池田旅館

製麵所 池田 源 吾

北巴拉ナ、ロンドリーナ市

母國訪問の皆様に

母國訪問の皆様の爲めに今回特別に皆様の御便を計る可く當館には左の係りを設け親切、丁寧、第一としてみな様のためにサービスする事に致しましたから何卒御利用下さい

◆歸國手續係りは一切の手續を無料にてお任せ一日で完了致します故御出帆迄御自由に各所御見物が出来ます

◆御土産物係りは向ブラジル品で日本にて珍しがられる左の品々を最も安く御世話致します、ブラジル特産ステッキ、珈琲エキ、ス、チョコラツテ、毛皮類、繪葉書類

◆御荷物係りは御歸國の節一番御不安の御荷物は當館宛御送附下されば一切無料にて御預り致し破損等のおそれあるものは親切に修理して御乗船の時責任を以て積込み致します

◆御出迎係りは御不馴れのサントス市内にはインシキタキシヨが多いため毎列車毎に驛に御出迎を致して居ります故御利用命下されば直ちに静かな當館へ親切に御案内致します

向兩替並に御不審の點は御問合せ下されば直ちに詳細御返致します

大阪商船會社切符 **潮ホテル** サントス市プラス

取次所 クーバス街二三九

Fua Braz Cubas, 239 - Caixa, 228 - Tel. 5191 - End. Electr. 'USHIHU' - Santos

住宅地に果樹園に

北巴拉ナ土地會社指定

池田旅館

製麵所 池田 源 吾

北巴拉ナ、ロンドリーナ市



おへソも表情する 無用の長物にあらず

おへソも表情する

「何時見ても暇さうなのは顔の穴」……とは川柳のいひ草だが、さういへばまさしくその通り、一體われわれの顔の穴の周囲の皮膚は、無沙汰な表情をしてゐるものはない、處でこの閑寂な表情たるや、かつて吾々が母親のおなかの中に無邪気に眠つてゐた當時は文字通り命の綱のついでごとで、なごりてはならぬ大切な生命の関門だつた、オギャーと生れてこの世の明るみに出されるが早いとか、トタンにお腹はたちまふ失業してその日以來「無爲にして化す」老莊的境涯が始まるのだ、思へば運命の逆轉、わがおへソも表情する身の有爲轉變を仰つることなく、もつて生れたおへソも表情するの微笑を浮べてゐる。

婦人の立場から



める者さへあることを自覚致す
▼女教師は母の心を持つてゐます、児童の母たる女教師を活用し、児童の絶対的信頼を利用して教育の實をあげるといふことはその論議より以上大切なものではないでせうか、もつと女教師の存在を認識して重大な児童教育の上に、その立場を重要視してほしいと思ひます（A植民地K子）

寄る年波も何のその 眼の下の小皺を 若返らす新手術

何 氣なく鏡に映つた自分の顔は女同志ならで理解出来ぬ心理、眼の下に、ふと小皺がよ、同時に若しものこり出したことを発見したとしたら、顔に現れた悪魔の影を追ひ拂はせられたいと恐ろしい悪魔ふことが出来るとしたら、それの影のやうに映るか……これは恐らく神の救ひの手とも見え

がある、それから日本人のやうに垢の溜つた汚いおへソは駄目だけれど、外国人の美しいピンク色のおへソは子宮外妊娠で内出血を起すと紫色に變つ、つまりこれが一つの症だ、と見る醫者もある、して見るとおへソも馬鹿にはなして置くべきだ

先づ小皺の寄つた部分の皮膚を伸ばし、其處へ特殊な薬液を塗ると、その部分の赤く腫れ上つて来た、それをそのまゝに約八日位放置しておきますと薬液はすっかり皮膚の下迄浸みこみ上の瘡蓋はポロボと落ちて了ひます、さて新しい皮膚の後ろとか、頭髪の中とか余り目立たぬ場所から切り取り割がされた眼の下の部分に特殊な方法で植へつけると、手術のあとには少しも目立たず、手前に見えなれば跡方もなくなつてゐます

歯磨きマニキュア
先づ少量の練歯磨き粉を布につけて爪をよくこすり、そして又乾いた歯磨きの布でふきとりながら爪を洗ひなさい……肉付をホツソリ洗ひたい方は、湯利腫を薬屋から買つていらつしやい、そして大匙五杯を風呂に入れてその中へ十分湯身を入れて浸けま

アメリカから
花嫁御の注文
月下氷人に大角海相

動物の目玉と
人間の眼の入替

昨午十一月五日のこと大角海相の許へアメリカから一通の手紙が舞ひ込んだ、差出人が米國ペンシルヴァニア州マンホール市のジョージ・ラフソニーとあるのみで全く未知の人

美容と養生を お風呂召すなら

日本人は世界一の風呂好きと云はれる位ですが、折角入浴するだけなく、より以上に貴人の身体を美しく且つ健康にする入浴でなければなりません

先づ第一にお浴しめした後は、入浴中に海塩をマツターで全身が赤くなるまでマツターで全身が赤くなるまでマツターで全身が赤くなるまでマツターで全身が赤くなるまで

Dr. H. SAITO
MEDICO
Rua Inconfidencia, 6-35 - Bauri
醫學士
齋藤等
パウル市 = 電話二六九

今田求
東京醫學士
島岱盛英
リンス市ルイス・ガマ五八
電話一四三 郵函二〇三

PHARMACIA JAPONESA
Rua Conselheiro Furtado, 15
日本藥局
電話二一八六六
(ホテル常盤下)

Gymnasio de São Paulo
Rua Libero Badaró, 40 C sob.
サンパウロ中學
検定試験科(ケルソ・デ・マツレーザ)三年
各種上級學校準備科
公認課目教授効果的
教授優秀教員授業料低廉
研究室完備、日本人生徒歓迎

Escola Profissional Feminina D. PEDRO II
Rua Libero Badaró, 40-C 1.º andar
ドゥン・ペードロセグンド
女子技藝學校
裁縫、裁斷、造花、圖案、應用
技術設備完全
日本人女生徒歓迎

CLINICA DENTARIA
Rua C. de Saizias, 10 - Tel. 2-3029
院醫科齒
郎一眞上村
十街スダーセルサ・ヂ・デンコ市聖
番九二〇三・二 話

HOTEL BASTOS
バストス移住地又各方面の御視察に特別御便利を計ります
御車着の度に毎に御出迎ひ致します
親切清潔!!
正直本位!!
弊館の自動車一三四番を御利用下さい
ランシヤリア 郵函二二五

富田家
聖市コンセルレロ
フルタード街三七
電話二一六七七

T. KAKO
Rua X 59 a 63
Mercado Municipal
Tel. 3-0322 End. Teleg. Laranja, Rio
加古商店
多少に不拘弊店を御利用下さい

Enxada "BUGRE"
無敵のエンシヤダ
全國一流店にあり

DERBY PAULISTANO
大衆娛樂の明星
ダービー
ハウリスターノ
アベニダ・サンジョオン五八八
(シネ・プロドウエイ隣)
機械競馬の快走
必ず皆様の興味を喚び
快い設備と
ふん圍氣は皆様の御満足を保証します
是非一度御試し下さい

OPTICA
S. PAULO
RUA S. BENTO, 49
TEL. 2-4900
CAIXA 2050
END. TEL. HUNGARIA
カメラとメガネ
小型活動寫眞機の御用命は寫眞に關しては何んでも、どんな商品でもある店、最新の設備、安値、取引の確實なる店、聖市最古の歴史を有する
カーザ・フオートカへ
最近完成せる日本文カタログ各種、値段表寫眞藥方集、藥品名、露出表付カード、一九三五年度カレンダー(巻等々)
御申越次第といたても差上ります
CASA FOTOPUTICA Caixa, 2080

CINE TABARIS
シネ・タバリス
午後二時より引續き開演
意馬心猿
巴里から来た娘、亂舞する美女の群
一九三五年超モダン様式美女裸體群像
御注意、本館上映のフィルムは絶対他館に再映せず
禁場場入・人婦婚未・人小
〇〇八ルミ二ナールトルホ間晝
〇〇五ルミ三分人一間夜

時話の題

藤井藏相辭職の顛末
増税案につまづき
刀つき矢折る

藤井藏相 踏襲すると言明してしまつた、なく増税のことは書いてく...
藤井藏相の辞職は、その日の中にも岡田首相が訪ねて「私の方針はこうなつた...」と報告したから財政には...
藤井藏相の辞職は、その日の中にも岡田首相が訪ねて「私の方針はこうなつた...」と報告したから財政には...
藤井藏相の辞職は、その日の中にも岡田首相が訪ねて「私の方針はこうなつた...」と報告したから財政には...

東北の凶作地を覗く(三)

秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...

忍従は耕す
日は暮れて道なし

秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...

實らずとも

秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...

増税案

秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...

秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...
秋の十和田湖へ「のボスタ」つてからといふものは、検査が...

Dentista SIBIQUY Villa Nipolandia 伊藤達馬

DENTISTA R.C. do Fimhal, 113 山岡

翻譯と法律事務 杉山英雄

KENKICHI SAKAGAMI CORRECTORES DE CAMBIO E TITULOS

M. FURUZAWA CIRURGIÃO DENTISTA

Arthur Vienna & Cia. Ltda. 手塚爲泰

御料理 富美の家

太陽ホテル

西村組

S...ミシン...S 中尾肥料店報

M. NISHIMURA 石材商

内山代理大使殿題字、美麗アルバム装帖説明付

ANZE MORIZI 安瀬商店

AUTO-OMNIBUS

Hotel Mikasa

小淵友市

三笠

中山清吉

御料理 富美の家

太陽ホテル

西村組

安瀬商店

AUTO-OMNIBUS

Hotel Mikasa

小淵友市

三笠

中山清吉

艶めかしい貫突

手袋タクサン買ヒタイ

米國へ婦人用品の輸出

「トイッ品を日本品に轉向」

愉快な貿易ニシテ、米國から日本へ婦人用品の輸出が急増している。これは、米國の婦人用品の生産が、戦後、著しく増加したためである。米國の婦人用品の生産は、戦前、日本の輸入に依存していたが、戦後は、米國の生産力が回復し、日本へ輸出するようになった。特に、手袋、靴、下着などの艶めかしい品が、日本の市場で人気を博している。日本品に轉向する米國の輸出業者は、日本の消費者の嗜好を研究し、より魅力的な製品を開発している。これは、米日貿易の発展に貢献していると考えられる。

泣かした戰場悲話

偽凱旋兵の大木ラ

悪辣戦死者を騙る男

天晴れ満洲がへりの陸軍看護長になり、泣かした戰場悲話。偽凱旋兵の大木ラ、悪辣戦死者を騙る男。天晴れ満洲がへりの陸軍看護長になり、泣かした戰場悲話。偽凱旋兵の大木ラ、悪辣戦死者を騙る男。天晴れ満洲がへりの陸軍看護長になり、泣かした戰場悲話。偽凱旋兵の大木ラ、悪辣戦死者を騙る男。

お化澤の怪

意外・大水銀鏡

北海道で世界的発見

お化澤の怪、意外・大水銀鏡、北海道で世界的発見。お化澤の怪、意外・大水銀鏡、北海道で世界的発見。お化澤の怪、意外・大水銀鏡、北海道で世界的発見。お化澤の怪、意外・大水銀鏡、北海道で世界的発見。

東郷神社

東京鹿島に

一ヶ年の除喪後に許可

東郷神社、東京鹿島に、一ヶ年の除喪後に許可。東郷神社、東京鹿島に、一ヶ年の除喪後に許可。東郷神社、東京鹿島に、一ヶ年の除喪後に許可。東郷神社、東京鹿島に、一ヶ年の除喪後に許可。

職業戦線の女性

共稼は嫌ひ

職業戦線の女性、共稼は嫌ひ。職業戦線の女性、共稼は嫌ひ。職業戦線の女性、共稼は嫌ひ。職業戦線の女性、共稼は嫌ひ。

快力男

貨車を口で引

快力男、貨車を口で引。快力男、貨車を口で引。快力男、貨車を口で引。快力男、貨車を口で引。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

本春から實現する

立派な大東京港

本春から實現する、立派な大東京港。本春から實現する、立派な大東京港。本春から實現する、立派な大東京港。本春から實現する、立派な大東京港。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

慢性胃腸病

タカ胃散

慢性胃腸病、タカ胃散。慢性胃腸病、タカ胃散。慢性胃腸病、タカ胃散。慢性胃腸病、タカ胃散。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

棉花栽培者各位

アルセニアト・デ・シモンボ

棉花栽培者各位、アルセニアト・デ・シモンボ。棉花栽培者各位、アルセニアト・デ・シモンボ。棉花栽培者各位、アルセニアト・デ・シモンボ。棉花栽培者各位、アルセニアト・デ・シモンボ。

シナジオリピランガ

寄宿、半寄宿及通學制

シナジオリピランガ、寄宿、半寄宿及通學制。シナジオリピランガ、寄宿、半寄宿及通學制。シナジオリピランガ、寄宿、半寄宿及通學制。シナジオリピランガ、寄宿、半寄宿及通學制。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

慢性的胃腸病

タカ胃散

慢性的胃腸病、タカ胃散。慢性的胃腸病、タカ胃散。慢性的胃腸病、タカ胃散。慢性的胃腸病、タカ胃散。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

急讓店

營業種目

急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。急讓店、營業種目。

ウルチマオーラ

ワ米上院議員ウキリアマキン... 九日

罷業實に九日間

郵便電信従業員復職す

各新聞は鐵道小包で發送

舊臘廿六日以来罷業状態に陥つ... 各新聞は鐵道小包で發送

何分年末年始の期として九日間... 罷業に郵便物局内に山積

横濱万国博に 伯國品陳列 近く見本積出

伯國政府は日伯通商促進のため... 伯國品を陳列することになり

母國觀光團 参加申込殺到

本社主催母國觀光團は出發... 期の切迫するにつれ参加申

石油統制に關する英米蘭三國... 第三大說明要求に對し廣田

蘭海運協議會よ、具體化... 來二十五日大阪商船社支

咖啡、アメリノ... 廿年の洗練されたサ

教員講習會 四ヶ所で開催

父兄會主催の第二回小學校教員... 講習會は去三日より聖市、マ

前途ある青年 厭世自殺

去る五日午後聖市郊外のバルケ... カンタレイラに年餘二十四五

積極的に活動 チエテ製糸工場

暫く休業を餘儀なくされてゐた... チエテ製糸工場は植民地より

Table with market prices for various goods like rice, oil, and other commodities.

Photographia Allema advertisement for photography services.

Baptista Ferraz & Cia. advertisement for mechanical services.

Advertisement for a youth group or club.

Advertisement for a travel agency or tour.

Advertisement for a shop or business.

Advertisement for a youth group or club.

Advertisement for a shop or business.

Advertisement for a shop or business.

Advertisement for a shop or business.

Advertisement for a youth group or club.

Advertisement for a shop or business.

Advertisement for a youth group or club.

Advertisement for a shop or business.

Large advertisement for 'Brazilsche Sprache' (Brazilian Language) featuring a photo of a landscape and detailed text about the course.

NIPPAK SHIMBUN

Jornal Nipponico de maior circulação no Brasil

Anno XXI

São Paulo — Quarta-feira, 9 de Janeiro de 1935

Num. 917

NIPPAK SHIMBUN

Director-Proprietario:
SACK MIURA

Redacção, Administração e Officinas
Rua da Liberdade, 144-A e 146
Caixa Postal, 375
Telephone 2-3926

Endereço Telegrafico: "Nippak"
SÃO PAULO - Brasil

ASSIGNATURAS

Para o Brasil
Por anno 30\$000
Por semestre 16\$000
Numero avulso \$500
Para o Exterior
Por anno 60\$000

Anuncios

Temos á disposição dos interessados
uma tabella completa de preços para
anuncios nesta folha. Telephone 2-3926

O commercio externo do Imperio nipponico

O volume do commercio externo do Imperio ultrapassou consideravelmente o das importações.

A possibilidade da restauração economica, até aqui, residiria nos Estados Unidos se esse paiz tomasse a iniciativa de resolver as questões das dividas de guerra.

O momento geral do commercio exterior é favoravel á situação commercial.

O Dia da Confraternização Universal visto pelo sr. Hirota

Na mensagem publicada na imprensa de Tokio, por occasião do Anno Novo, o ministro dos negocios Extranjeros, sr. Hirota, declarou que o Nippon é uma grande força na estabilização da situação internacional.

Estas são as principais palavras do illustre ministro nipponico:

«Nossas relações diplomaticas melhoram gradativamente á medida que a posição do Nippon tem sido melhor comprehendida pelas nações estrangeiras.

Continuamos firmemente convencidos de que a criação do Mandchu-Koku e o seu desenvolvimento como um grande paiz são necessarios á paz no Extremo Oriente. No tocante ao desarmamento acreditamos que um novo tratado equitativo para todos, deve ser concluido, para que seja inaugurada uma nova ordem de coisas».

Enfermo, o Imperador nipponico

Os telegrammas vindos de Tokio informam que a saúde do Imperador Hirohito achase, presentemente, ligeiramente abalada.

O estado do Imperador não é, todavia, de natureza a inspirar cuidados.

O Imperador Hirohito embarcára hoje para Hayama, juntamente com a Imperatriz e seus filhos, numa viagem de repouso.

Sustada a censura no Nippon

As autoridades policiaes de Tokio levantaram a censura que se exercia sobre todas as informações relativas ao complot descoberto, no mez de novembro, contra a vida do principe Sayonji, do visconde Takino, do ministro das Finanças e muitas outras personalidades policiaes.

Noticias e telegrammas do Nippon

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos jornaes)

PONTOS DE VISTA...

Novas esperanças de um novo tratado naval — O embaixador Saito colloca em seus devidos termos a denuncia do tratado de Washington — Primeiros efeitos da denuncia do velho accordo

O embaixador nipponico, sr. Saito, representante do Imperio junto ao governo britannico, falando á imprensa londrina, referiu-se a um novo possível accordo, substituto do tratado de Washington, ao fazer declarações sobre porque o Nippon denunciou o velho tratado.

O Nippon denunciou o Tratado por não concordar com a proporção de 5/5/3 e devido ao facto da Inglaterra e do Estados Unidos não quererem conceder a igualdade ao Nippon.

O tratado de Washington limitava as esquadras ingleza e norte-americanas a 525.000 toneladas, cada uma, de navios de linha, e 135.000 toneladas de porta-aviões, ao passo que o Japão recebia 315.000 e 81.000 respectivamente, e a França e a Italia 175.000 cada uma.

São considerados navios de batalha todos os que desloquem mais de 10.000 toneladas e sejam armados de canhões de mais de 8 pollegadas.

Nas palavras textuais do embaixador Saito, temos:

«Mesmo que um accordo não possa ser realisado, as consequências desse insucesso não me inquietam. Os povos interessados intelligentes e os seus governos ponderados. Nenhum delles quererá por certo iniciar uma corrida armamentista perigosa. Não ha nenhum conflicto sério entre o Nippon e os Estados Unidos.

Não existe entre os dois paizes nenhum problema que não possa ser resolvido por via diplomatica. É animador e reconfortante registrar que os dois governos se esforçam no sentido de impedir o surto de ultrajacobinismo irresponsavel. Chegou o momento de examinar a situação, seriamente».

O embaixador Saito referiu-se por fim ao bom senso e «espírito esportivo» que sempre permitiriam aos dois povos resolver satisfactoriamente as questões de interesse reciproco e rematou com a obser-

vação de que continuava cheio de esperanças e optimismo.

Logo após a denuncia do tratado de Washington, as diversas nações interessadas nas questões navaes, passavam a fazer as suas proprias e extensivas conclusões, emitindo os seus pontos de vista.

Vejamos como se expressaram os literarios, através as palavras do articulista Lor Lothman, que já exerceu as funções de secretario de Lloyd George:

«Ou o Nippon levava em conta os interesses vtaes que aconselham continuar ligado ao Tratado com um reajustamento no tocante á Mandchuria, ou o Partido Militar ganhará a partida e cogitará de um novo ataque á China. No primeiro caso não haverá dificuldades. No segundo presenciaremos nova corrida aos armamentos navaes, com o consequente perigo de guerra. Para garantir a paz seria preciso um accordo firme entre signatarios do Tratado de Washington, sobretudo entre a Gran Bretanha e os Estados Unidos. O perigo é que o Partido Militar do Nippon pensa que pode repellar a manobra que dê resultado na Mandchuria, não somente na China, mas no Pacifico sem que a Gran Bretanha e os Estados Unidos se opponham. Torna-se portanto necessario demonstrar a esse partido que semelhante

não tem nenhuma possibilidade de alcançar exito.

Se as potencias anglo-saxonias, a U. R. S. S. e a China estiverem realmente unidas, as clausulas do Tratado de Washington ficarão salvaguardadas e o perigo da guerra desaparecerá».

Vamos, agora, ao que pensamos os francezes.

O governo francez exprime a esperança de que o referido tratado seja substituido por novo accordo, de que deveriam participar, além dos cinco signatarios do tratado denunciando, as demais potencias maritimas.

A nota lembra que, quando da ratificação do tratado de Washington, o Parlamento francez indicara o seu desejo de não o ver prorrogado além de 1936.

Por occasião da ratificação, o governo francez notificara os Estados Unidos da impossibilidade em que se encontrava em estender os coefficients fixados para a tonelagem dos couraçados, dos porta-aviões e das demais categorias de navios, e isso porque aquelles coefficients não correspondiam á importancia das respectivas potencias. O governo francez assignalava, finalmente, a necessidade de levar em conta actualmente as marinhas pertencentes aos Estados que não participam do tratado de Washington, chamando attenção para as im-

IMPRESSOS?

Executam-se com rapidez e perfeição na
Secção de Obras do

“NIPPAK SHIMBUN”

Fabrica de Saccos de Papel para
Armazens, Bars e Confeitarias
Rua da Liberdade, 146 — Caixa, 375
Telephone, 2-3926 — SÃO PAULO

O monopolio petrolifero no Mandchu-Koku

A politica de porta aberta daria felicidade ao mundo inteiro

As notas entregues ao Nippon pela Inglaterra e pelos Estados Unidos, a proposito do monopolio petrolifero no Mandchu Koku, são vasadas num tom mais firme que as precedentes e serão, provavelmente as ultimas.

A Inglaterra e os Estados Unidos se recusam a admitir que a questão do monopolio não interessa ao Nippon e que seja preferivel deixar as companhias petroliferas negociarem directamente com as autoridades mandchu's. Fazem parte que as sociedades nipponicas participam em 80 % no monopolio e o governo em 1/5 somente. Acrescentam que a manutenção do monopolio constitue uma violação do art. 3. do «Tratado das Nove Potencias» e recordam a declaração do Mandchukohu, assim como as garantias do Nippon, relativamente ao respeito pelo «principio da porta aberta». Os Estados Unidos invocam, além disso, o artigo 15 do Tratado Sino-Americano de 1844, e o artigo 14 do Tratado

Sino-Americano de 1858, que interdittam todo monopolio na China.

A simultaneidade das gestões inglezas de 2 de Julho, 21 de Agosto e 24 de Novembro, e das Americanas de 7 de Julho, 31 de Agosto e 1.º de Dezembro, levam os meios officiaes nipponicos a dar a entender que a questão do monopolio foi suscitada, sobretudo, para criar dificuldades ao Nippon no decorrer das conversações navaes.

Mas os americanos parecem recuar particularmente que o monopolio petrolifero se torne um precedente para o monopolio do tabaco e de outros productos, ameaçando comprometter definitivamente o commercio dos Estados Unidos com a Mandchuria.

Informações de boa fonte dizem que os Estados Unidos e a Inglaterra combinam não mais dirigir notas e tomar medidas positivas, de accordo com o teor da resposta Nipponica. Os Estados Unidos cogitariam de, no caso de não

serem attendidos, estabelecer o controle das exportações de petroleo, restringindo a concessão de licenças para o Nippon e a Mandchuria, contando com um entendimento prévio com a Inglaterra.

Interrogado pelos representantes da imprensa estrangeira a respeito das declarações feitas por Lloyd George na Camara dos Communs, nas quaes o chefe liberal accusava o Nippon de ser contrario ao regimen de porta aberta na China, uma autoridade, autorisada a falar em nome do ministro de Negocios Extranjeros, afirmou que o Nippon desejava, mais que qualquer outra nação, que aquelle principio fosse respeitado, pois é vantajoso para seus interesses. Todavia era preciso reconhecer que certos paizes se esforçavam, infelizmente, para fechar as portas da China ao Nippon, como resultava, incontestavelmente, da decisão de 24 de Janeiro da Sociedade das Nações, sancionando a «boycotagem» das mercadorias nipponicas pela China em consequencia do caso da Mandchuria.

O porta-voz do Ministerio dos Negocios Extranjeros concluiu: «O mundo inteiro seria mais feliz se todas as nações fizessem a politica de porta aberta».

O algodão

Do «O ESTADO»

O successo alcançado pela ultima safra algodoeira levou muita gente a atirar-se ao plantio do algodão.

O tempo, no anno agricola passado, de Junho a Julho, correu esplendidamente, depois da secca que prejudicou as plantações feitas mais cedo.

Colheu-se algodão sem chuva até Junho.

Todas as pragas, como o curuqueirê e a lagarta rosada, por exemplo, não appareceram generalisadamente.

Onde foi plantada semente não expurgada, a lagarta-rosada não produziu os costumeiros estragos, de vulto.

Foi um anno feliz para o algodão, que talvez custe a vir outro.

Vamos procurar attender englobadamente a muitas cartas que temos recebido de interessados na cultura do algodão.

Sempre aconselhamos pelo que a pratica de ha muito tem demonstrado que antes de meados de Outubro não se deve semear algodão, principalmente para escapar de se dar grande infestação pela bróca da raiz e tambem escapar do tão conhecido veranico de Setembro, assim chamado o periodo de secca annual que vai de meados a fins de Setembro ou a meados de Outubro, periodo esse ultimamente cada anno mais prolongado.

A grande falha que se deu no nascimento das sementes nas plantações do cedo foi devido ás sementes terem sido postas na terra humida, porconsequentes começando logo a germinar e antes que tivessem chegado a abrir o primeiro par de folhas, terem sobrevivendo muitos dias seguidos de sol, reseccando a terra e as sementes já com raiz apontada.

O algodão depois de nascido, quando já com o seu parzinho de folhas, é muito renitente ás seccoas, ficando passando por muito tempo á espera de chuva, crescendo na raiz, satisfazendo-se com algum sereno.

Em muitas plantações, principalmente nas feitas em roçadas, uma larva comprida o fina, amarelada, como que vidrada, atacou as sementes em formação.

Essa larva subterranea é o «wire worm» dos inglezes, aqui chamada «alfinete».

Vive varios annos na terra roendo raizes.

Nas terras limpas de vegetação, quando reseccadas por prolongada estiagem, fazendo-se a plantação logo depois de uma chuva seguida de nova estiagem, esse bichinhos atiraram-se ás sementes em germinação na falta de outro alimento humido.

Tanto atiram-se ao caroco de algodão nascente, como ao milho, ao arroz, ao feijão e a outras sementes germinando, roendo, notadamente, as raizinhas novas desde que começam a apontar.

O caroco de algodão posto na terra humida nasce rapidamente, começando a germinar em horas. Se sobrevem uma secca que reseque a terra quando em franca germinação, com a raizinha primeira em desenvolvimento, á raizinha pára de crescer e murcha. E' geralmente nos periodos de secca que os «alfinetes» atacam as sementes.

Muitos lavradores devem ter verificado que depois de feito o replantio em algoeal onde já começava nascer matto, os «alfinetes» não mais procuraram as sementes. E' que encontraram fatura de raizes, não se atirando ás sementes de algodão em germinação.

Não ha meio rapido para combater essas larvas subterraneas que, em certos annos, chegam a dar grandes prejuizos, conforme o correr do tempo.

Nos terrenos annualmente arados quasi que desaparecem, devido a irem sendo quebradas pelo arado as «lojas» onde as larvas passam a nymphas para depois passarem a insectos perfeitos, que são pequenos vagalumes.

Outra causa de terem falhado muitas plantações, é as sementes terem sido plantadas muito fundo e não raro cobertas com torrões.

(continua)

portantes mudanças que se impunham depois da assignatura desse instrumento diplomatico.

Pel que se viu, as grandes nações navaes estão seriamente abaladas com a denuncia do tratado de Washington, e, ao mesmo tempo, confiantes na execução de novo ac.ordo.

Actualmente, a attitude dos paizes navaes é entrar em novos methodos, afim de chegar á limitação dos armamentos.

O velho tratado representava um thema preferido pelos limitadores dos armamentos.

Eis porque todas as nações attribuiram grande responsabilidade assumida pelo governo de Tokio ao ter este denunciado o accordo desproporcional da limitação da forç.!

Funeraes de um juriconsulto

Os membros da Corte Permanente de Justiça Internacional de Haya receberam com intenso pesar a noticia do fallecimento do juriconsulto nipponico, sr. Adachi, membro e antigo presidente daquella corte.

O extinto contava 64 annos de idade, fóra embaixador do Imperio em Bruxellas e trabalhou toda a sua vida em prol da justiça e da paz internacional.

O illustre diplomata foi sepultado, com todas as honras militares, no cemiterio da capital da paz: Haya!

Elogios a uma empreza brasileira

A United Press communica de Tokio que os directores das organizações de caridade e os jornaes nipponicos elogiam calorosamente a empreza brasileira Sylvar Meat Company do Rio Grande do Sul que enviou uma tonelada de carne secca para ser distribuida aos pobres. Muitas das pessoas que receberam a carne dirigiram cartas de agradecimentos á firma Sylvar.

Embarcou em New-York o embaixador Sawada

O novo embaixador, sr. Sawada, designado pelo governo do Imperio para assumir o posto de chefe da embaixada nipponica junto ao governo brasileiro, embarcou em 7 deste mez na cidade de New-York, devendo chegar ao Rio de Janeiro em 18 do corrente.